



TITLE:

現代中国における辛亥革命研究(7):  
孫文と周辺の研究書も多彩

AUTHOR(S):

狭間, 直樹

---

CITATION:

狭間, 直樹. 現代中国における辛亥革命研究(7): 孫文と周辺の研究書も多彩. 東亜 1983, 190: 95-105

ISSUE DATE:

1983-04

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/122322>

RIGHT:

© 1983 霞山会

## 孫文と周辺の研究書も多彩

狭間直樹

(京都市大学人文科学研究所助教授)

肖像と相対する形で、人民英雄記念碑前に孫文の肖像が配されることこそ、先行革命家へのなよりの敬意の表現なのである。

とはいえ、孫文にたいする高い評価が、解放後いっかんして不動のものだったわけではない。そこには、中国の政治状況の転変とほぼおなじ軌跡をたどって、かなり顕著な振幅がみられた。その研究面における反映を、孫文を主題にした論文、著作の発表量の増減を通してみると、一九五六年の生誕九十周年を最初のピークとし、反右派闘争・大躍進期に激減、調整期に漸増、文革期に再凋落、四人組打倒後の辛亥革命七十周年にあたるここ数年が第二のピークとなっているのである(本誌五十六年十月、一七二号、拙文参照)。

一  
辛亥革命を代表する人物といえ、やはり孫文<sup>スンワン</sup>に指を折らねばならないだろう。その役割の重要さは、革命政府の臨時大總統就任に端的に象徴されているが、その後も生涯を通じて革命事業に献身することにより、中国近代史上、毛沢東<sup>マオゼド</sup>とならぶ重要人物となることになる。国民党からは「国父」とあがめられ、共産党からは「中国人民の偉大な革命の息子」とうやまわれているが、敵対する双方からこのようなあつかいをうけた人物がかつてあったろうか。国父と人民の息子<sup>スンワン</sup>とは、個人的役割の評価のしかたが、百八十度逆になっているが、歴史的役割にたいする高い評価にかわりはない。中華人民共和国において、国慶節の日に、天安門の毛沢東の

まず孫文にかんする伝記等、研究者の著作をあげよう。わ  
たしが手にしたものは、尚明軒『孫中山伝』（北京出版社  
一九七九年三月第一版一九八一年九月第二版）邵伝烈『孫  
中山』（上海人民出版社一九八〇年十月）、李時岳・趙矢元  
『孫中山与中国民主革命』（遼寧人民出版社一九八一年九  
月）、蕭万源『孫中山哲学思想』（中国社会科学出版社一  
九八一年五月）、張磊『孫中山思想研究』（中華書局一九八  
一年八月）、韋傑廷『孫中山哲学思想研究』（湖南人民出  
版社一九八一年八月）である。標題からもあきらかなよう  
に、前三者は伝記、後三者は思想分析の書物である。

蕭氏の書の辛冠潔の序文によれば、解放以後に孫文の哲学  
思想を論じた専著は、わずかに王学華『孫中山の哲学思想』  
（上海人民出版社一九六〇年）だけしかなかったという。  
二十年以上まえの小冊子である。とすれば、一度に三冊もの  
著作があらわれたことは、解放後の孫文研究史上、破天荒な  
慶賀すべき事態、ということになる。三著は、張氏が三民  
主義分析を正面にすえてその哲学的基礎に説きすすむのた  
いし、蕭氏、韋氏は自然観、認識論、歴史観等の分析を主軸  
にすることにみられよう。そのとりあげ方にちがいが  
あり、それぞれに分析の重点のおきかたもややことなる。し  
かし、孫文思想を唯物主義的哲学思想（自然観、認識論）と  
唯心主義的ないし二元論的歴史観（社会観）との結合体と

らえる枠組は共通している。この唯物主義的哲学思想の強  
は、すくなくとも蕭氏、韋氏の書にみるかぎり、主として文  
革期に公刊された『簡明中国哲学史』『中国哲学史簡編』と  
いった哲学史の二元論的把握にたいする批判と不可分のよう  
である。

伝記の三著は、いくらか叙述の力点に差異があるとはい  
え、孫文の生涯を時間的におったもので、偉大なる革命家像  
を描くべくつとめている。叙述は正確で、先行の研究成果も  
よく採りいれられているようだ。ただ三著に共通する不満は、  
孫文の弱点欠陥について、いくらかの理論面でのそれをのぞ  
きほとんど筆がおよんでいないことである。偉大な革命家に  
欠陥があつてはならないとの倫理的要請がそこには厳然と存  
在するかのごとくである。弱点、欠点をもちながら、なおか  
つ革命的な指導者でありうるの方が偉大に感じられると  
おもふが、いかなものであろうか。実際、孫文ほど多くの  
人びとの献身的な自発的援助をひきだした人物はまれなので  
あつて、それは革命的偉大さと相補う人間的魅力をぬきにし  
ては考えられないのである。

ひとつだけ日本とも関連する具体例をあげよう。辛亥革命  
後、孫文は借款獲得のためにかなり批判をうけるようなこと  
をもあえて辞さなかった。漢治萍問題、招商局問題、満州  
「譲渡」問題等である。満州「譲渡」については日本側の資

料しかいまは明らかでないから、真の意味での譲渡であつた  
かどうかは保留せねばならないが、いずれも主権をそこなう  
条件のものであったことはうたがえない。前二者は公然化して  
つづれ、最後のものは未発のうちにおわつた。これは革命家  
孫文の解明にとって關鍵性をもつ問題——自分の構想する革  
命の遂行を最優先してやりぬこうとする革命家として不可欠  
の資質と現実的諸関係とのかわりの問題——だともうが  
三著はいずれもこのことにふれないのである。

また、日本との関係で気になるのは、有名なあの「大アジ  
ア主義」講演のあつかいである。一九二四年十一月二十八  
日、神戸商業会議所等五団体のもとに應じて兵庫県立高等  
女学校講堂でおこなわれたその講演は、同日夜の歓迎宴会で  
の講演とともに、長い孫文の革命歴の最後をかざるものと  
なつた。それはアジア諸民族の連合の必要性を説き、「欧米の  
覇道の文化を手にいれているうえに、またアジアの王道の文  
化の本質をもつ」日本にたいし、今後、「西方覇道の手先と  
なるのか、それとも東方王道の干城となるのか」と問いか  
け、するどく選択をせまるものとして当時喧伝されたもので  
ある。欧米覇道と東方王道の機械的対比、没階級性を批判す  
るのはたやすいし、マルクス・レーニン主義の観点からすれ  
ばきわめて問題の多いものであることはたしかである。しか  
しその直後に病床に臥せることになつた孫文に呼ばれてかけ

つけた唯一の日本人、萱野長知の記するところでは、病床の  
孫文がもつとも気にしていたのは、かの講演にたいする日本  
人の反響のことだったという。

ところが、この「大アジア主義」講演については三著はみ  
なふれない。李・趙氏また邵氏の書は、孫文が広東から北京  
へと北上する途上、船便の關係で日本に立ちよつたこと、寄  
港先の各地で不平等条約廃棄などをうったえたことを、かる  
く述べるだけである。尚氏の伝はややことなり、本文で十一  
月二十五日の神戸等の国民党支部歓迎会での講演（内乱を  
くすには軍閥とその背後の帝国主義をやっつけねばならぬと  
の内容）にふれるのみで二十八日のことに及ばず、巻末に附  
録された「年譜簡編」では、二十八日の項に、夜の会での講  
演と昼の会での宋慶齡の講演をあげながら、昼の会のメイン  
であつた「大アジア主義」講演は書かない。また、中山大學  
孫中山研究室等編『紀念孫中山先生』（文物出版社一九八  
一年十月）なる画集では、二十八日の講演の写真（二八九図）  
をのせながら、その説明では話のなかの、奪われた権利を返  
還させるためには、帝国主義と非妥協的に武力闘争をせねば  
ならない、との二句を引くだけで、演題はかかげない。

その後の歴史が孫文の願望とはまったくうらはらの展開を  
みせたし、「大：主義」という語にふくまれる侵略的傾向が  
マルクス・レーニン主義の歴史学になじまないこともうたが

いない。しかし、それが孫文の国際関係にたいする認識のひとつの表現であったことも、より以上にたしかなことである。奉天派軍閥の意を体して北京の中央政權をにぎった段祺瑞と談判するために北上する途上、国内政局とのかかわりでしめた国際情勢認識であり、反帝武力闘争の主張と表裏をなす孫文思想の一面なのである。そうなればこそ、これらの体系的な孫文伝が、この面を等閑にふさずに、積極的に見解を提示する必要があったとおもうが、いかがであろうか。

つぎに孫文についての資料集のたぐいをあげよう。特筆されるべきは『孫中山全集』の刊行開始だが、これについてはすでに河田梯一氏の本誌一八五号の紹介がある。ついで、辛亥革命七十周年にあわせて『孫中山選集』（人民出版社一九八一年十月）が再版された。初版は一九五六年十一月の刊、つまり孫文生誕九十周年を記念したものだった。該書は選集とはいえ、台湾で刊行されている全集がおそらくは政治的關係から収めていないソ連関係の文章、「チチェリン宛返書」「レーニン追悼演説」「ソ連宛遺書」等を含んでおり、重要な資料的価値をもつものだった。（ちなみに「大アジア主義」は収めない）再版は、その名のとおり、収録対象の文章はまったく初版とおなじである。しかし、二篇をのぞき省略部分をなくして原文を回復したため、字数も四万字ちかく増え、『孫中山全集』編纂の中心メンバーである黄彦がすぐ

れた校訂、注釈をほどこしているため、面目をまるで一新し、日本でいう改訂新版になっている。すなわち、各文章の発表年月の誤まりが大はばに訂正され、採録の典拠をすべて詳細にあげているのである。また、当然ながら旧版の誤植、たとえば『民報』一周年記念会の演説で「三大主義」とあるべきところを「三民主義」と誤り、それにもとづいて誤った立論がなされたりしたこともある、いささか罪な誤植も訂正されている。要するに、本書は収録数は同じとはいえ、旧版（一九六六年の再刊をふくめて）をもつ人もかならず新版をそろえねばならない性質のものである。

年譜は『孫中山年譜』と題するものが二種刊行された。一つは魏宏運編（天津人民出版社一九七九年六月）もう一つは広東省哲学社会科学研究所歴史研究室等の全集編纂者たちの合編（中華書局一九八〇年七月）である。詳細なのは後者だが、黄季陸増訂『国父年譜』（中国国民党中央委员会党史史料編纂委員会一九六九年）とは、編集方針のちがいがいからであろうが、たがいに出入りがあるので、彼此参照するのがよい。また、中華版は項目のかなりに典拠をあげていて利用者の便をはかっているが、「微引書目」を附録しているのだから、略号をあたえて全部の典拠をしめしてもらえば、さらに有難かった。

孫文に関係ある周辺資料となると、その範囲の確定に頭を

なやませねばならないが、ここでは『広東文史資料』をふたつだけあげておこう。『孫中山史料專輯』（二十五輯、一九七九年十月）は、本来、一九六六年の生誕百周年に刊行されるべきところを林彪、「四人組」の破壊活動に邪魔されていた、という「十年空白」の歴史を体現したもの。『孫中山与辛亥革命史料專輯』（輯数表示なし、一九八一年八月）は輔仁文社のリーダー謝纘泰「The Chinese Republic: Secret History of the Revolution」の訳載が目につく。

画集では、前掲『紀念孫中山先生』は、三百余点の重要写真をのせる。わたしなどはじめて目にするものも多く、参考の価値はきわめて高いとおもう。あえてひとつだけ注文をすれば、複数の人物が写っているばあい、ごく一部の共産党人士ぐらいしか名前をあげていないが、時がたてばたつほど比定が困難になることは自明なのだから、資料集としては、分っているかぎりの名前をあげてもらいたかった。『紀念辛亥革命七十周年』（北京・中国新聞社一九八一年十月）も孫文中心に編集されたものである。姚遷・古兵『中山陵』（文物出版社一九八一年十月）は美しいカラー版で、廖仲愷・何香凝墓と鄧演達墓を附録のにのせていることに注目させられる。

なお、孫文未亡人として、革命的立場を堅持した宋慶齡が一九八一年五月二十八日、八十八歳の生涯をとじた。什刹海

の北側の元醇親王府に設けられた故居を同年十月に参観したとき、主なき館にたどよう、寂莫感にとどまらぬ哀愁の念にうたれたものだったが、そのときは、女史の遺骨はすでに上海万国公墓の宋家の墓地に葬られていたのだった。なぜ宋家の墓地なのか気になる。なお、辛亥革命にはあまり直接にかかわらないが、『宋慶齡紀念集』（人民出版社一九八二年三月）が出たことをつけくわえておこう。

## 二

一九六六年の孫文生誕百周年記念にあたり、その準備委員会が、孫文、宋慶齡、黃興、廖仲愷、朱執信、章炳麟、秋瑾、柳亞子の八人の文集を刊行する、との報道がなされたように記憶する。のちの行蹟との関係で、解放後の観点からしても問題がないところが選ばれたのであろう。ところが、記念集会の報道記事（『北京周報』同年四七号）では、孫文と宋慶齡の選集を刊行したことを報じているだけである。

（本誌一七二号所収拙文一五頁上段の、「すべて烏有に帰した」との一句は「北京の集会をのぞいてどうなったか明らかでない」と訂正させていただく）孫文のものは、五六年版選集そのままの重印だが、宋慶齡のものは一四五篇の文章をふくむ選集が新たに刊行された。他の人物については、そのときは出なかったと思うが、いま、孫文は全集まで出はじめた

し、『黄興集』についてもすでに松本英紀氏が紹介した(本誌五十七年十月、一八四号)。これは一九六六年のときの計画と直接の関係はないだろうが、河田氏がすでにふれていた『章太炎全集』(上海人民出版社)の第一巻(一九八一年二月の奥付だが、実際は十月の刊という)も出た。湯志鈞の編集校訂にかかり、「膏蘭室札記」「詒絳札記」「七略別録佚文徵」の三種をおさめている。

注目すべきは広東省哲学社会科学研究所歴史研究室編『朱執信集』(中華書局 一九七九年一月)である。この特異な革命家の文集としては、死後すぐに編纂出版された同名のもの(建設社 一九二一年)があり、これまでもっとも浩瀚なものだったが、中華版は文章の数だけでいってもほぼ五割増しと充実がいちじるしい。もちろん、朱についての最初のまとまった評伝である呂芳上『朱執信与中国革命』(台湾商務印書館 一九七八年六月)のなかから中華版未収の手紙をいくつかひろうこともできるが、今後の研究にとってもっとも基礎的な資料となるものである。柳亜子は、劉斯翰が詳細な注をほどこした『柳亜子選』(広東人民出版社 一九八一年一月)が出、一九五九年の『柳亜子詩詞選』も再刊された。また、かれのもっとも重要な活動の場であった南社について、鄭逸梅編著『南社叢談』(上海人民出版社 一九八一年二月)なる大冊が出た。社友として活躍した著者が精根を

こめた本書は、きわめて有用な概史であり、列伝であり、詩注である。なお、恰好の概説書である楊天石・劉彦成『南社』(中華書局 一九八〇年十月)の後記には、『南社志』の編纂がすすんでいることがみえる。『秋瑾集』『廖仲愷集』も一九六〇年代初に出版されたものがあることはあるが、より完備したものの刊行がまたれる。

ところで、研究書の対象はここ数年、かつてなく多彩となった。改良主義者や反革命もとりあげられるようになったのである。辛亥革命における孫文の敵役として悪名高い袁世凱については、李宗一『袁世凱伝』(中華書局 一九八一年十一月)、侯宜傑『袁世凱一生』(河南人民出版社一九八二年八月)がでた。解放後、歴史小叢書といった小冊子のものはいくつか出たが、腰をすえた伝記はおそらくはじめてであろう。李氏のものは、J. Chen, Yuan Shih-k'ai, 1972, (守川正道訳『袁世凱と近代中国』岩波書店一九八〇年八月)につづく本格的な研究書で、とりわけ北洋軍閥集団の形成についての具体的な叙述は興味ぶかいものがあり、着実な研究をふまえた好著である。

改良主義者については、孟祥才『梁啓超伝』(北京出版社 一九八〇年十一月)と何漢文・杜遇之編著『楊度伝』(湖南人民出版社 一九七九年八月)がある。前者は転換期の学者ジャーナリストとしてたぐいまれな業績をのこした梁

の学問の紹介にかなりのスペースをさいているのが目につく。政治的立場にはからい著者も、梁が転形期の学問形成にはたした役割をたかく評価しているのは、平心の論といえよう。

楊度については、あまり知られているとはいえないが、もっと注目されてよい人物である。楊は清末の日本留学生で、一方のリーダーとして『金鉄主義』なるものとなえた。金とは黄金、鉄とは鉄砲、すなわち経済的軍事的強国をめざすということなのだが、それをあくまで君主立憲でやるべしとしたのである。自分の思想に忠実に、楊は、清朝につかえて憲政編查館の実質的責任者になり、袁世凱の帝制を先頭にたておしすめ、張勳の復辟にも加担した。三度の苦汁をなめたあと、君権論をすて一時仏学研究に沈潜するのだが、ふたたび政界に登場してついに一九二九年秋に中国共産党に入党する。批准したのは周恩来とされる。この数奇な運命は伝記の対象としてこのうえなく面白く、実際、時間的流れを追うだけでも意味がある。しかし、政治実践から仏学研究へ、仏学研究から共産党への道筋を思考の内面に即してたどれば、さらに面白いにちがいない。中国近代史においては、政治的实践から身をひいて仏学研究、ないし仏教信仰に身をまかせ例はいくらもあるが、仏学研究からさらに共産党へ、という例はまずない。一読して、そのところをもう少しふ

かく掘りさげてほしいと感じた。楊がこの世を去ったのは一九三二年冬、もはや半世紀もまえのことだから、困難な注文であることはわかっているが、やはり本国の研究者ならでできるかもしれないので、あえて望んでおきたいのである。

楊度といえは、袁世凱の帝制運動を積極的に推進した、いわゆる籌安会の『六君子』の筆頭として有名であるが、陶菊隱の四十年前の旧作『籌安会“六君子”伝』(中華書局 一九八一年七月)が再刊された。著者自身のいうところでは、同書は袁の罪惡を暴露することを意図したものなのに袁世凱伝としなかったのは、蒋介石の弾圧をおそれたことだという。陶氏が同書を基礎に大はばに書きあらためたものが『袁世凱演義』(中華書局 一九七九年四月)である。この種の歴史読物としての演義物の再刊は最近の一寸した風潮のようである。演義による歴史知識の普及を通じて救国の道を模索した蔡東藩の一連のもので辛亥時期にかかわるものとして、『民国通俗演義』(一九二一―一九二九年刊。中華書局より一九七三年十月、八〇年一月に再刊)、『慈禧太后演義』(一九一八年刊。浙江人民出版社より一九八〇年四月、八一年一月に再刊)がある。慈禧太后とは清末半世紀にわたって大清帝国に君臨した西太后のことである。該書の発行部数は六十五万部とあるのをみて、あるいは一桁まちがっているのでは、いかとうたぐったが、当時、中国で生活していた人の話では、

大変な人気でそれだけ大量に印刷されても入手困難だったという。読物として解放後の歴史書にはない面白さがあることは当然として、それにしても、の感がふかい。

中国において、改良主義者にしろ反革命にしろ、歴史的に重要な人物の研究がつきつきと公刊されるようになったことは、わたしたち外国人の研究者にとってうれしいことである。そして、このような研究領域の拡大と並行するかのごとく、外国のすぐれた研究の訳書が公刊されるようになった。

丘権政・符致興訳黄沫校『孫中山与中国革命的起源』(中国社会科学出版社 一九八一年六月)、楊慎之訳『改良与革命—辛亥革命在兩湖』(中華書局 一九八二年二月)等がそれである。前者は、孫文の前半生のすぐれた伝記と定評のあるH. Z. Schiffin, *Sun Yat-sen and the Origins of the Chinese Revolution*, 1970 の訳であり、後者は兩湖における社会変動を詳細に分析して改良主義的都市上層ブルジョアジーの革命における役割を解明した J. W. Eschrick, *Reform and Revolution in China, The 1911 Revolution in Hunan and Hubei*, 1976 の訳である。また、これは反訳する必要はないが、台湾の張朋園、張玉法らの社会学的方法による労作が高い評価をうけていることもたしかである。歴史研究における門戸開放は、今後いっそう広がっていくにちがいない。

が、それは当然に辛亥後をふくまないし、収録誌でも発刊詞、宣言をおさめているのは比較的すくないので、やはり附録しておいた方がよかったとおもう。

辛亥時期とは一九〇〇年から一九一八年までをさすが、その間に刊行された雑誌は七、八百種にも達するらしい。在華外人、海外留学生などの出版にかかる中文誌をふくめた数である。紹介はそれらのうち重要なもの二百余をとりあげることとで、第一集には四一種をおさめる。前掲『中国近代期刊篇目彙録』の一九〇〇～一一年を対象とする三冊におさめるものが約二二〇種であるから、二百余にのぼる解題がいかに老成なるものが分るう。わたしなどには名前すら初見というものが、いくらかもある。

解題の文章には、五四のそれにはなかったのだが、筆者名が明記されており、第一線の研究者を動員した大事業であることがよくわかる。本書については利用させていただくばかりで注文はないが、気のついたことを二つだけ書いておく。ひとつは、欧綴の誤植である。『開智録』の説明で普通名詞も個有名詞もまちがっているが、「原本」はもちろん、前掲『辛亥革命前十年間時論選集』も正しく排印しているし、最近の中国の出版物の欧綴の誤りが多すぎるような印象をうけているので、あえて記しておく。いま、「原本」といったが、一九〇〇年から翌年にかけて横浜で刊行された『開

### 三

研究者待望の『辛亥革命時期期刊介紹』第一集(人民出版社 一九八二年七月)がついに出了。全五集の大計画、「期刊」とは定期刊行物のことで、要するに辛亥革命期の雑誌紹介である。はやくに公刊された『五四時期期刊介紹』全三冊(人民出版社 一九五八、九年)の恩恵をこうむってきたものにとつては待望の書なのである。両者は基本的に同性質の書であり、ともに丁守和が中心となって編集したものである。ただ、五四の方は中国共産党中央委員会馬克思・恩格斯・列宁・斯大林著作編訳局研究室編となっているのに対し、辛亥の方は中国社会科学院近代史研究所文化史研究室丁守和主編となっている。後者は、文化史研究室のスタッフに同院新聞研究所報刊史研究室のメンバーがくわり、さらに大学の陳旭麓、北京大学の陳慶華ら、斯界の専門家のほばひろい協力をえて完成したものだということである。

五四の紹介が解題を柱に発刊詞、宣言、目録等を附録し、その附録が量的に過半をしめるのに対し、辛亥の紹介は解題だけしかふくまない。目録は上海図書館編『中国近代期刊篇目彙録 一八五七～一九一八』全六冊(上海人民出版社 一九七九)にゆずった、とのことである。発刊詞等については、張枏・王忍之編『辛亥革命前十年間時論選集』全五冊(三聯書店 一九六〇～七七年)があるからかもしれない

『智録』は『清議報全編』附録『群報摘華』に採られた二篇の文章が伝わるのみなのである。金冲及の要領を得た解題もそれを中心にしてののだが、すこしまえに『開智録』が日本で見られたとの誤報が中国で流れたことからもうかがえるように、該誌の発見が鶴首されていることをしるしておく。

もうひとつは趙金鈺の『民報』の解題についてである。

『民報』は孫文を総理とする中国同盟会の機関誌で、辛亥革命期ではもっとも重要なものといつてよい。その『民報』には、二十七号問題というミステリーがあるのだが、趙氏がそれに言及しないのは不思議である。二十七号問題とは、簡単にいえばこうである。一九〇八年十月十日発行の奥付をもつ『民報』二十四号と二十七号が存在し、その二十七号が日本政府によって十月十九日に発売頒布停止処分をうけた。二十七号は二十四号のなかの、章炳麟の「代議然否論」と湯増璧の「革命之心理」の二篇と図画二葉だけをぬぎだしたものである。相違点は、目次の頁をのぞけば、表紙をふくめて三カ所の号数表示だけで、あとは発行日をふくめて奥付までおなじである。こまかくいえば、二葉の図画の順序が逆転しているが、それは問題にする必要はないだろう。そのうち湯増璧の文章と「本社簡章」(裏表紙裏掲載)の内容が治安破壊等の嫌疑で新聞紙条例違反とされ、日本政府の弾圧をくったの

である。

弾正した側の日本の文書には『官報』をもふくめてはつきりと「二十七号」とあるのたいし、された側の当事者、編集兼発行人の章炳麟は「二十四号」という。どちらも同じ内容だからいいではないか、と言えはそれまでだが、やはりそうもいかない。別に話を面白くするためにそうしたわけでもなからうが、発禁処分後一年あまりのちの一九一〇年二月一日付で、二十五号、二十六号（これはまったく内容のことなるもの）が出ていたのである。かつてわたしたちが眼にしえた科学出版社一九五七年影印本の『民報』には、二十七号はふくまれていなかったから、だれもそれを問題にしなかった。しかし、一九六九年にでた台湾の中国国民党中央委員会党史史料編纂委員会蔵本の影印本には、なんと二十七号がふくまれていたのである（もちろん前述した二十七号の内容もこれによっている）。以後、趙氏もかならず参考にされたであろう小野川秀美「民報解題」（『民報索引』下 京都大学人文科学研究所 一九七二年）がこの説明をはかり、中国でも唐振常が兩三度にわたって論文を発表している。唐氏の説は日本側文書の二十七号は二十四号の誤、というもののだが、この結論は二十七号が存在する以上、あまり説得力をもたない。現状では小野川氏のように、不明とするほかはないと思うが、解題としては、やはり言及せねばならない問題である。

とおもう。

なお、ついでにふれておけば、前掲『中国近代期刊篇目彙録』の「民報」の項に、第十五号夏期増刊『張非文弄蒼園文稿余』（科学出版社 一九五八年十月影印）が落ちているのは、惜しいとおもう。

「期刊」をとりあげてきたので、ここで方漢奇『中国近代報刊史』上下（山西人民出版社 一九八一年六月）にふれよう。「報刊」とは新聞雑誌、つまり日本でいうジャーナリズムである。該書は十九世紀中葉から五四運動前までをおおうが、いうまでもなくほとんどは辛亥革命期をあつかっている。方氏は、解放後における報刊史研究の出版のすくなきをうれえ、三十年来の蘊蓄をかたむけて本書をものしたとのことだが、戈公振の古典的著作『中国報学史』をうける作との自負もうなずける。採録対象は多く、重要人物には略伝を付し、さらに、ともすればコマギレになりがちのこの種の書物の弊をまぬかれるべく、歴史的背景とかかわりを重視するなど、叙述にも工夫がこらされている。もちろん大部の著作だから、わたしなどでも気のつく誤りがないわけではないが、しかし本書の最大の欠陥は索引をかくことである。類書では、曾虛白『中国新聞史』（国立政治大学新聞研究所 一九六六年）がいささか杜撰ながら索引をつけていることにより、利用者のこうむる便宜ははかりしれない。再刊のさい

にはぜひ索引をつけてほしいものである。

最後にひとつ、かわった資料をあげよう。馮自由『革命逸史』第六集（中華書局 一九八一年七月）である。「革命逸史」が辛亥革命研究にとってきわめてふつうの資料であることは、もちろんだれも知っていることだが、とくに「かわった」といったのは、解放前の著作、それも国民党右派の長老の著作の続編が大陸で刊行されたことに驚いてのことである。逸史の第一―五集は一九三九年から四四年にかけて、抗日戦争のさなかに悪条件をおかして刊行されたもので、おなじく馮氏の『中華民国開国前革命史』（一九二八―三〇年）、『中国革命運動二十六年組織史』（一九四八年）とともに興中会、同盟会等革命派関係の第一級の資料とされるものである。

第六集の内容についていえば、いまではすでに多くの資料類がでているので、これではかみられないものはすくない。調べやすい伝記をみてみると、鄭照、程家樸、蔣翊武、孫武、劉公、張振武のいずれについても、第六集所収のもののはずで『中国国民党史稿』列伝の部、あるいは『革命人物誌』などにおさめられている。しかし、まったく同じなのではなく、逸史のものは、孫伝は張難先の文章を襲いながら撰者の名をしめさず、文末の論贊もけずっている。おそろく意図的にそうしたのだらう。また、程伝は宋教仁の文章

を借りてかなりくわしい注をつけており、これはかならず本書によらねばならない。また、「中国同盟会最初三年會員人名冊」のように、どういう意図より出たものかはわからないが、姓名籍貫しかしるさないため、折角の資料の利用価値が激減しているものもある。『革命文庫』第二輯所収のおなじ資料によれば、それはさらに、年齢、加盟年月日、主盟人、紹介人、備考の五項をふくんでいるのである。

『革命逸史』等の馮氏の著作が解放後いかなるあつかいをうけてきたのかはしらないが、あるいは鄭魯の『中国国民党史稿』などのように一般の閲覧には供されていなかったのではないかとおもう。いま眼にしえた第六集は、「内部発行」の試用本だからかもしれないが、借覧しえたかぎりでは、刊行にいたる経緯の説明もなく、該書がいかなる素材をもとに解放前の続編の形式をとって出版されるにいったったのかはわからない。しかし、国民党右派のものであれなんであれ、もとの体裁を襲って刊行するという資料重視の姿勢は、歴史研究者によってひとしく歓迎されるのであって、今後いっそう多くの出版がなされることをのぞみたい。